

## 〈私の研究〉

# 実心実学を中心に

小川 晴久

私の現在の研究を大別すれば、東アジア近世の実心実学研究と朝鮮（文化）史研究の二つである。前者は東アジアの気の哲学の研究、江戸時代の哲学者三浦梅園の研究といふかえることができ、後者は近代の独立協会研究と北朝鮮の山の中の強制収容所の研究が今の関心の焦点である。以下簡潔に説明することにする。

## （一）東アジア近世の実心実学研究

近世というのは東アジアの17世紀から19世紀中葉までを指す。実心実学とは実心を重んずる実学のことであるが、実心を欠落させた近代（現代）の実学とは異なる。

東アジアの近代以前には近現代の実学（実用の学、応用の学）とは異なる実学が存在し、生きていた。というより、儒教や朱子学が実学と呼ばれていたのである。実学という概念は儒教（朱子学）の自己意識として11世紀に登場した。北宋の儒者程伊川が『中庸』の哲学を実学と規定したのが、それである。程伊川は『中庸』の哲学をしっかり把握すれば一生涯役に立つ、汲み尽せないほどの豊かな内容をもっていると認定した。こゝに実用の要素をみてよいが、哲学がその本質であることが重要である。儒者が自らの学、儒学（こ

こでは『中庸』を実学と自覚したのは、仏教や老荘思想が実社会を重視しないのに対し、儒学はその反対で民衆の生活に責任をもつという内実があるという意味である。こうして実学という規定が登場すると、実学が朱子学の隆盛と共に儒教の代名詞となり、古代の六府三事の学（水火木金土穀と正徳・利用・厚生）や修己治人の学が実学の内実となっていく。正徳や修己が実心に当り、利用・厚生や治人が実学に当ると考えてよい。だから近代以前の実心実学は儒学や朱子学と考えてよいのであるが、私は17世紀以降の実心実学に熱いまなざしを向ける。16世紀末に中国にやってきたイエズス会の宣教師たちが東アジア世界に伝えたヨーロッパの学問（西学）の洗礼を受けて以後の実心実学である。中華意識を打破した、また儒教の枠を崩した百科の学としての実学である。

マテオリッチは地球が円いことを明快に中国に伝えた。天文学者（洪大容ほか）を通じて中国中心主義が打破された。西学はカトリックの許容する範囲の天文学（天動説、チコ・ブラーへの折衷主義）ではあったが、幾何学や測量学を伴っていて、計測に秀れていた。方以智や三浦梅園が評価した質測（実測）の学である。質測の学を中心にして西学は百科の学を特色とした。学問の世界は広いことが伝わり、儒教の枠はとり払われた。百科の学としての実学となり、学派のちがいは本質的意味を持たないようになった。朱子学だけでなく、陽明学や老荘や仏教からも学ぶべきものがあれば摂取された。17世紀以後の実心実学は西学と出会うことによって自己中心性と儒教の枠を打ち破ることができた。だから17世紀以降の最良の実心実学は儒教の実学ではないのである。儒教を相対化した学問とその

意識である。

しかし、近代以後の実学とちがうのは実心を重んじることである。科学や技術に関心をもちつつ、実心の大切さを忘れなかった、近世の実心実学が注目されるのである。百科全書派の実心実学であるが、朝鮮の洪大容、日本の三浦梅園はその典型である。「惟れそれ実心実事日々に実地を踏む。先ずこの真実の本領ありて、然る後に凡そ主敬致知修己治人の術、方に措置する所ありて虚影に帰せず。」(洪大容)。梅園には有名な「誠といふの説」の随筆がある。

近世の実心実学に熱いまなざしを向けるのは、世界に向って開かれた精神を持ちながら、何よりも実心を重んじる学問であるからである。実心とは自然の前にこうべをたれる態度であり、人間の基本的営みに忠実であり、誠実を根幹とするものである。21世紀の学問はすべて地球の生態系の維持・保存に何よりも責任をもたねばならない。東アジア近世の実心実学はその責務を果たすため我々を導いてくれるものと考ええる。

## (二) 朝鮮(文化) 史研究

私の朝鮮との出会いは一九六四年頃に読んだ『朝鮮哲学史』(平壤で一九六〇年に出版。日本語版は一九六二年)で、朝鮮の近世に実学思潮という新しい学問が登場し、その中にとっても魅力的な洪大容という天文学者がいることを知ったことである。宇宙無限の視野を切り拓いていた『鑿山問答』(漢文)がその魅力の源泉であった。「洪大容の宇宙無限論」という拙稿を携え、私は一九七八年に一年間韓国に留学した。37歳の時であった。それは朝鮮実学(実心実学)との出会いでもあった。朝鮮実学を通して東アジアの近代以前の実学

と遅まきながら出会うのであるが、その成果は拙著『朝鮮実学と日本』に収められている。

韓国に一年留学したことが契機となり、朝鮮(韓国)史の講義(授業、近年は近現代史)をある大学で十数年続けている。また市民講座の形で朝鮮文化講座を友人たちと19年続けている。この間、壬辰倭乱(秀吉の朝鮮侵略)の勉強会を四百年目の一九九二年から九八年まで公開の形で行なった。このような営みの中から三年前から独立協会運動(一八九六―九八)と徐載弼の研究を始めている。この運動は帝制ロシアの駆逐に成功した。一八九八年にこの運動が国王を中心とする保守派の意思と日本の助言によって潰されたことによって、抵抗の母体がなくなり、その後の日本による併合が容易になった事情がある。日本人にとって独立協会運動の認識はとても重要である。甲申政変でやぶれた徐載弼が十年間日本ではなくアメリカで勉強したことはとても意味があった。徐載弼は大変魅力的な人物であることを強調しておきたい。

北朝鮮の山の中の強制収容所の研究ときいて驚かれる人が多いと思う。私は恥しいことに一九九三年八月に始めて在日の遺家族からその存在を知り、半年後の一九九四年二月に日本語版の出た『北朝鮮脱出』(上下、姜哲煥・安赫共著)で更に詳細にそれを知って、驚愕した。山の中の強制収容所の存在を金日成・金正日親子は徹底して否定し、隠し続けてきたので、その形成過程を知ることとはとても難しい。この地獄のような恐ろしい山の中の収容所(十ヶ所前後)の一日も早い全廃を願って、その研究が続けている。もしまだでしたら、皆さんもこの手記を読んでほしい。